

私たちの広場

【特集】ワークシヨップ

【連載】フランスのシティズンシップ教育〈第4回〉

【連載】絵本 尾崎行雄〈第4回〉



No. 303

2008年11月30日発行

財団法人 明るい選挙推進協会

名言の舞台	3
特集 ワークショップ	4
・「ワークショップ」という新しい学びと創造の場	4
ワークショップ企画プロデューサー 中野 民夫	
・効果的なワークショップをつくり出す基本的な手法	7
組織コンサルタント 堀 公俊	
・“あおもり町” 町長選挙の公報づくり	10
青森県明るい選挙推進協議会常任委員 渡部 一清	
・まちづくりゲームを活用した常時啓発活動	12
沖縄県明るい選挙推進協議会委員 新田 繁睦	
・ワークショップ「選挙と社会生活」	14
創造性コンサルト・グループ代表 小川 義則	
フランスのシティズンシップ教育〈第4回〉	16
教室をコミュニティに——「生徒会」活動	
梶山女学園大学准教授 山田 真紀	
自在に仕事ができる言葉力の鍛え方〈第4回〉	18
言葉と現実の一致を心がける	
中央大学専任講師 伊藤 章雄	
メイスイ列島フラッシュ	20
各地の活動	
明るい選挙啓発ポスターコンクール 大臣賞決定	22
絵本 尾崎行雄〈第4回〉「普通選挙法成立を目指して」	24
協会からのお知らせ、編集後記	27

色彩豊かにシンプルに描かれた町並みに、投票箱の輪郭線と投票口を描くという大胆な構図のポスターです。伝えたいことをどのような発想で伝えるかがポスターでは大切ですが、このポスターは一票が未来への町づくりにつながることを独創的なアイデアで的確に表現しています。

〈表紙の紹介〉
村上 尚徳
(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)

鈴木真衣さん
愛知県知立市立知立中学校1年生(受賞当時)





善からは善のみが、 悪からは悪のみが生まれるというのは、 しばしばその逆が真実である

マックス・ヴェーバー

1864年生、1920年没

第一次世界大戦敗北直後の一九一九年に、混乱をきわめるドイツで、社会学者ヴェーバーが学生に対して行った講演「職業としての政治」の中の一節です。

この講演でヴェーバーは、政治を考える上では、信条倫理と責任倫理という二つのものの間の緊張を正しく知る必要があると強調しました。

信条倫理とは理想を何よりも大切にする考え方ですが、こうした発想に立つ人々は、良い目的を実現するためには、ときには汚い手段も必要になるということを理解しない。また、逆に、良い目的のための行動が、かえって悲惨な結果をもたらす危険性も無視しがちだとヴェーバーは批判します。

これに対して、責任倫理とは、

政治的な結果を重視する考え方です。ヴェーバー自身は、政治の世界では結局は結果責任が問われると考えており、彼は責任倫理の重要性をより強調しています。

しかし、彼がこのように述べたのも、当時のドイツでは、素朴な信条倫理があふれ過ぎていたという判断があったからです。ヴェーバーは、政治は「頭脳だけでおこなわれるものではない」とも述べて、信条倫理の大切さも指摘しています。

ヴェーバーは、二〇世紀以降の社会科学や歴史学などあらゆる分野に計り知れない影響を与えた、ドイツが生んだ「知の巨人」といえます。戦後日本でも、大塚久雄らによって紹介され、広く読まれてきました。

ワークシヨップ

研修手法には様々なものがありますが、最近では、企業においても役所においても、講義によって知識を付与する研修から、実践能力の向上を図る参加型の研修へと重点が移行しています。いわゆるワークシヨップと呼ばれる研修手法で、明るい選挙のための研修でも取り入れられるようになりました。

研修は、明るい選挙の常時啓発活動の主要な柱の一つです。各地にワークシヨップが広がり、啓発活動が活性化することを願って、ワークシヨップの概論と啓発活動での実践事例を紹介します。

ワークシヨップの広がり

「ワークシヨップ」という言葉が、ここ一〇年くらいで日本でも急速に一般化してきた。講師や先生の話聞くだけの「講演」や「講義」というやり方ではなく、参加者同士が、グループに分かれて感想や意見を語り合ったり、議論しながら一緒に提案を創ったりするような参加型の場が、広く「ワークシヨップ」と呼ばれてきている。

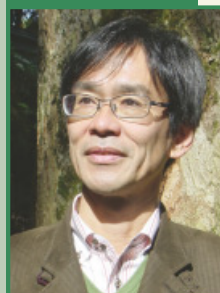
従来、何かを「学ぶ」といえば、「先生の話聞く」という受動的なスタイルが一般的だった。しかし、一方的に話が長々と続く、どうしても眠くなってしまう。また、ただ聞くだけでは、翌日には忘れてしまうことも多い。その場にせいかく同じ関心を持った人が来ていても、受講生同士が話す機会もなく別れてしまう。出会いもないし、そこから何か新しい動きが生まれることも少ない。私自身、学生の頃から、こういう一方通行的な講義や講演会は、「なにかが足りない」「もったいない」とずっと感じていた。

最近では、インターネットなど双方向のメデ

「ワークシヨップ」と新しい学びと創造の場

ワークシヨップ企画プロデューサー

中野 民夫

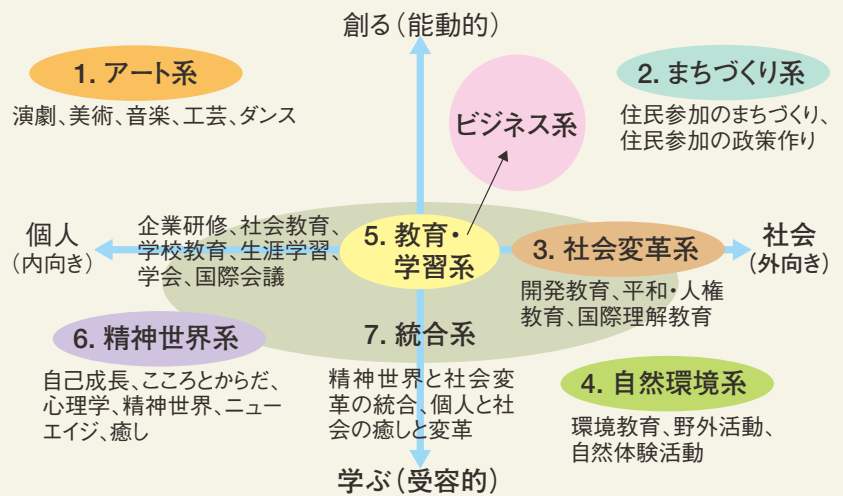


●プロフィール なかの たみお

ワークシヨップ企画プロデューサー。会社勤めのかたわら、ビーネイチャースクールなどで、人と人・自然・自分自身のつながりを取り戻すワークシヨップやファシリテーション講座を実践。明治大・聖心女子大・立教大学院の兼任講師。著書に『ワークシヨップ』（岩波書店）、『ファシリテーション革命』（岩波アクティブ新書）など。

アイデアが増え、特に若い人たちにとっては、ただ一方的に聞いているだけの場は、退屈してしまう。それよりも、参加者同士で感想や意見を話し合ったり、一緒に議論しながら提案や作品を創っていったりすると、参加意識も高まり、学びも深くなることが、だんだんとわかってきた。相互作用の中で、新しい発見や気づきがあり、お互いに活性化して場全体が熱くなり、皆が元気になっていく。これはいい方法だ！と、双方向の参加型の場である「ワークシヨップ」という場の持ち方が増えてきているのだ。

ワークショップの分類の試み



ワークショップの展開と定義

カタカナのまま広がっている「ワークショップ (workshop)」のもともとの英語の意味は、「工房」「作業場」である。手を動かしながら、何かを一緒に作る場だ。それがここ数十年の間に、欧米を中心に様々な分野で発展し、日本でも広がってきた。

演劇や美術など「アート」の世界では、習うだけでなくやってみよう、と早くからワークショップが取り入れられた。「都市計画」や「ま

ちづくり」の世界では、多様な価値観を持つ人々がお互いの利害や理想を共有・調整するための方法としてワークショップが開発された。最近は国内でも、行政による「住民参加のまちづくり」ワークショップが盛んだ。

また、多様な文化の相互理解を目指す「国際理解教育」や、南北問題を考える「開発教育」「自然体験を大事にする「野外教育」「環境教育」など、様々な社会教育の世界でも、ワークショップ的な参加型のスタイルが応用されてきた。人間関係トレーニングなど「心理学」系や、自分探しなど「精神世界」の少人数グループでの探求にも、早くから取り入れられてきた。

そして最近では、市民やNPOの活動を促進する「市民活動」の世界、また、話を聞くだけでは効果が上がらない「学校教育」や「生涯教育」、能動的な学びや創造を求める「企業」の研修やプロジェクト運営など、様々な世界で広がっている。

このように、私の知る世界だけでも、ワークショップは実に多様であり、それぞれに違ったニュアンスがあるので、なかなか一言で定義するのは難しいが、あえて私なりに一言で説明すると次のようになる。

ワークショップとは、講義など一方向的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験し、相互作用の中で、何かを共に学びあったり創り出したりする、新しい学びと創造のスタイルである。

ワークショップの3つの特徴

様々なワークショップに共通している特徴には、「参加」と「体験」と「相互作用」の三つがあると思っている。

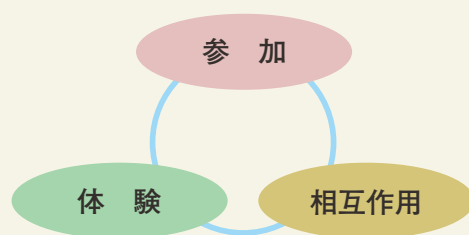
(1) 「参加」

「参加」とは、受身的に聞くだけでなく、能動的に発言したり、進んで何かの役をかって出たりして、自らそのグループに関わっていくことだ。こうしてお互いにその場の一員となっていく。例えば、あまりよく知らない人が集まったとき、「どこから来ましたか?」「お名前は?」「普段何をやっていますか?」などの問いに対して、一人ひとりが答えるだけでなく、立派な参加の第一歩になる。お互いにこの誰ともわからないと、最初に発言するのにも勇気がいるが、少しでも周りの人のことがわかると、発言しやすくなる。お互いへの関心や安心感も深まる。ワークショップは、アクティビティと呼ばれる様々な「活動」への参加のプロセスを通して展開されるが、このような過程を通じて、単なる人の集まりからある種のチームになっていく。

(2) 「体験」

「体験」とは、言葉だけでなく、実際に見たり聞いたり触ったり、身をもって経験すること。百聞は一見に如かず、というが、見るだけでなく、さらに実際に体験してみると、理解はずっと深まる。ワークショップの中では、様々なアクティビティを実際にやってみて、

ワークショップの三大特徴



体感を通して学んだり理解したりしていく。最近は、学校などでも「体験学習」といって、教室での教科書の授業だけでなく、実際に田植えをしたり、ゴミ処理場を見学に行ったり、様々な体験を通して学ぶことが取り入れられている。

(3)「相互作用」

「相互作用」とは、参加者同士がお互いに刺激しあい学びあうことだ。多様な背景や考え方を持つ異質な他者同士が、自分の感じていることや思いを、安心して率直に表明できると、多様な感じ方や考え方があり、それぞれなりの理由があることを知って、共感的に理解しようという気分にもなる。そのことはちょうど鏡のように、自分の感じ方やこだわりを浮き彫りにする。自分の思い込んでいた世界から解き放ってくれるかもしれない。一人ひとりの違いが刺激となり、触発しあい、対話を重ねていく中で徐々に新しい世界が出現してくる。そこには共に新しいものを創り出す「共創」の歓びと興奮が生まれる。

ワークショップの現代的意義

このような「参加」「体験」「相互作用」と

いう特徴が相乗的に重なり合って、人と人が集う場が暖まり、一人ひとりの学びも、グループ全体の創造力も、飛躍的に増大するのがワークショップの醍醐味だ。ワークショップが今なぜ求められているかというと、このような過程を通して、「他人ごと」だったテーマや課題が、いつのまにか「自分ごと」になることだろう。自分自身で考えたり、創ったりしたことには、おのずと当事者意識が高まり、責任を持って関わっていき続けたいという強いコミットメントも生まれてくる。

今の日本では、「どうせ変わらないよ」という諦めが満ちていると思う。しかし、ワークショップの中で、自分がちょっと勇気を出して言った一言が他の人を触発して別の意見を引き出し、どんどん相互作用の中で展開して、新しい提案が生まれる。そしてそれが実際の活動にも結びつく。「変わらない」どころか、自分のちょっとした一言が場を動かしかくを変ええる。人や社会を少しずつでも変えうるのだ、と実感する。そんな体験が、私たちの社会で投票率を上げ、民主主義を成熟させていくために、もっとも必要なのではないだろうか。

携帯やメールでコミュニケーションが便利になった一方、生身の人間同士で葛藤の中から何かを共に生み出していくようなコミュニケーション力が落ちていく現代、ワークショップは人と人との生のやりとりの中で、市民社会の成熟のための実験場であり訓練所であるのだと思う。

もあるのだと思う。

ファシリテーターと企画のつくり方

このようなワークショップ的な場の進行促進する役割を「ファシリテーター」という。「ファシリテート (facilitate)」という英語は、「促進する」「(事を)容易にする」という意味だ。ファシリテーターは、先生ではない。「教える」のではなく、参加者の学びが深まるように「支援する」役だ。だから話しすぎるのもよくない。参加者同士が、自ら話し合い、解決策や提案を創り出していきけるような、上手な仕掛けを準備し、進行していく。その時、先の「参加」や「体験」や「相互作用」が生まれるように留意していくことが大切になる。

ファシリテーターは、このように人の集った現場で協働や共創を促進していく役であるが、事前に主催関係者と一緒に全体のプログラムの企画し準備することも重要な役割の一部だ。

ワークショップのプログラムを企画するときには、与えられた時間内で、目指す成果を最大限引き出せるように、起承転結など流れのあるプログラムをデザインすることが大切だ。あるレストランで肉料理が自慢だとしても、コース料理ではいきなり肉料理をだすこととはないだろう。食前酒やスープや前菜で食欲をそそる。自然に会話が盛り上がってくる中で、まずは魚料理を出し、サラダなど小皿で一息つかせる。そしていよいよメインの肉

料理でピークを迎える。さらにそれで終わりではなく、デザートとコーヒーで余韻を楽しみながら、しめくくる。

このように、ワークショップでも、メインの課題に取り組むワーク（作業）をいきなり突きつけるのではなく、まずは目的や目標を確認することから始める。お互い安心して話せるように自己紹介的なワークで場を暖める。それから各自の経験から知恵を引き出す作業を重ねるなど、流れのある組み立てが大

切なのだ。最後には、全体を振り返ったり、

次への具体的な展開を考えたり、非日常の空間を「ああおもしろかった」で終わってしまわないような工夫も大切だ（詳しくは、堀公俊氏の稿参照）。

一人では諦めてしまうことも、仲間と共に問い合い、語り合いながら取り組んでいくことは楽しい。人と人の間で生きる人間にとって、ワークショップなど参加型の場合は、根源的な喜びも内包する大きな可能性を秘めている。

効果的なワークショップをつくり出す基本的な手法



組織コンサルタント

堀 公俊

ワークショップで使う手法は多岐にわたっており、扱うテーマや応用分野によって大きく違ってくる。本稿では、「若者の政治意識向上」をテーマにした一日程度のワークショップをイメージしながら、標準的なプログラムのつくり方や、進行上のポイントについて解説していく。詳しくは拙著『ワークショップ入門』（日経文庫）を参照してほしい。

起…関係性を高める

ワークショップで最初に行なうべきこと

いのは、集まった参加者を一つのチームにまとめ上げることである。

そのためには、一つ目に、みんなを共通の枠組みに収めなければならない。具体的には、ワークショップの、①狙い（目的）、②ゴール（目標成果）、③プログラム（進行表）、④ルール（約束事）、⑤メンバー（役割分担）などをファシリテーターと呼ばれる進行役が説明（オリエンテーション）する。できれば、紙に書いて会場のどこかに掲示しておくとうい。

起承転結型のプログラム



二つ目に、学習や創造が深まりやすい場をつくる必要がある。人の気持ちは周囲の環境に大きく影響され、部屋の選び、活動する人数、机や椅子のレイアウトなどによって活性度が随分違ってくる。参加者がリラックスして活動できるよう、居心地のよい空間づくりに心がけなければならない。

三つ目は、メンバーの参加度と関係性を高めることである。ワークショップのスタート時点では、不安と期待が交じり合い、誰しも緊張するものだ。「アイスブレイク」と呼ばれる、アクティビティ（活動）を通して心と頭をほぐし、場を暖めていく。

例えば、「チェックイン」と呼ばれるアクティビティがある。参加者全員が今の気分やワークショップに参加した理由などを、自己紹介とともに語っていく。それすら気恥ずかしいときは、二人ペアになって互いのことを語りあう「ペアインタビュー」が有効だ。

あるいは、挙手によって「選挙に行った回数」をアンケート調査したり、歴代の総理の顔写真を出して名前を当てるなど、軽いクイズをやって緊張をほぐす手もある。いずれの場合も、ワークショップが始まってなるべく早い時間に、参加者に一言話をして、それを受け止めてもらうことがポイントである。そうするだけで、気分が落ち着き、積極的に参加しようという気持ちが芽生えてくる。

承：資源を引き出す

ワークショップの一番の素材は、参加者が持つ知識、経験、思い、やる気などである。それをワークショップという名の鍋に放り込んで、グツグツと煮込んでいくのが前半戦の活動となる。そのためには、参加者の意見や思いをできるだけ発散させて、持てる資源を余すところなく引き出さないとけない。

おそらく、政治について全く関心のない人でも、テレビや新聞くらい見たことがあるだろう。社会科の時間に最低限のことは習っているはずだ。生徒会や自治会の選挙に関わった人もいるかもしれない。資源が全くのゼロというのはいない。

例えば、「政治」や「政治家」という言葉を聞いて思いつくフレーズを列挙してもらう。あるいは、政治に全く関心のない人には、その理由を付箋に書いて列挙してもらい、みんなの共通項や対立軸を探していく。そうすることで、自分でも気がつかないテーマに

する資源の掘り起こしができ、結果的に自分を知ることになる。加えて、他人と自分が違うことも知り、次の相互作用を起こすステップへの足がかりになる。

その程度では資源が足りないときは、ワークショップの場で、みんなで共通の体験をするのが効果的である。経験に優る資源はないからである。例えば意見が違う人たちが合意形成を目指す「コンセンサスゲーム」をやれば、民主主義の難しさが身をもって味わかる。時間が許せば、政治家の事務所を訪れる「フィールド調査」をしたり、本人に出てきてもらって政治について「レクチャー（講義）」をしてもらうのもよい体験になるはずだ。

転：相互作用を高める

ある程度の素材が集まったら、いよいよワークショップのハイライト、集まった素材や参加者同士をぶつけあわせて、相互作用を高めていくステップである。一度はチームを混沌の状態に陥れ、その中から自分たちの力で創造や学習を勝ち取っていかねばならぬ。

ここで使う代表的な手法として「ディベート」がある。例えば、架空の政治課題に対して、賛成派・反対派に分かれて徹底的に討論してもらい、政治の難しさや議論することの大切さを感じてもらおうのである。

真面目にやりすぎると対立が深刻になる場合は、決められた役割を演じながらゲームと



ファシリテーション・グラフィックの模様

して討論する「ロールプレイ・ディベート・ゲーム」という手法がある。「ロールプレイ（役割演技）」は、疑似体験を通じて、旺盛な相互作用が味わえる優れた手法だ。討論のテーマを実際の事例にして、「ケーススタディ（事例研究）」と組み合わせることもできる。もう一つ、このステップでよく使われる手法に「シミュレーション」がある。例えば、小グループに分かれて各々の政治家候補者を決め、その所信表明演説の原稿や選挙ポスターをみんなで作っていくのである。目標や成果物が明確で、競争の要素がある方がチームは活気づき、メンバー同士の相互作用も高まっていく。

このステージで大切なのは、対立や葛藤を恐れないことだ。そのためには、それまでの

ステップでチームづくりをしつかりやり、互いを尊重して受け止め合う「安心できる場」をつくっておかなければならない。

加えて、ファシリテーターが過度な対立とならないよう、舵取りをしておく必要がある。とはいえ、チームの活動に割って入る「介入」は必要最小限とし、チームを信頼して、自分たちの力で乗り切ることを見守るのにとどめておく。そのかわりに、「ファシリテーション・グラフィック」と呼ばれる技法を使って、議論の内容を分かりやすく記録していけば、チーム活動の大きな助けになるだろう。

結…成果を分かち合う

チームが自力で葛藤や混沌を乗り越え、収束のときを迎えることができれば、最後はそれを分かち合うステップとなる。この「腹落ち感」でワークショップに対する参加者の感想が大きく左右される。

例えば、先ほど紹介した選挙演説やポスターをつくるアクティビティなら、順番にグループ発表をして、よかった点と改善点を指摘し合っていく。あるいは、会場に即席の選挙ブースをつくって、支援者をどれくらい集められるかを競っていく。一人で何票か持つて「多重投票」で優劣を決めることもできる。

ただし、アクティビティの出来栄えがワークショップの成果ではない。今日のテーマである政治意識について、参加者一人ひとりが学んだり気づいたりしたことが本当の成果で

ある。最後は、ワークショップを通じて何を得たのかを、全員に語ってもらうとよい。

それはテーマに関するものに限らず、ワークショップのプロセス（過程）を通じて学んだこともたくさんあるはずだ。自分の思い込みに気づく人もいれば、他の参加者との関わり方の特性を発見する人もいる。こちらの方が重要なことが少なくない。

そのために大切なのが「振り返り」であり、ワークショップで得た発見や教訓をみんなに分かち合っていく。自分やチームの中で起こった様々なことを語り合いながら、その意味を探索していくのである。体験を学びにつなげ、他人事を自分事に変えていく、ファシリテーターの力量が問われるところだ。

そして、最後に忘れてはいけないのが、ワークショップという非日常の場を、日常の場につなげることである。終わった時の気持ちを語る「チェックアウト」とあわせて、明日からどんな一歩を踏み出すのかを、書いて発表しあったりするとよいだろう。

スキルとマインドを磨く

このように、ワークショップの必要な技術は幅広く、特にプログラムづくり、アクティビティの使い方、ファシリテーターの臨機応変な対応などは、現場を豊富に経験しないと自分のものにならない。

加えて、ワークショップが一発でうまくいくことはまれであり、何度も何度もやりなが

ら、プログラムをつくりこんでいかなければならない。まさにトライ&エラーの数だけ、ワークショップに磨きがかかってくるのだ。

そして、その中でスキル（技、Doing）だけではなくマインド（心、Being）も鍛えていくことも忘れないでほしい。

マインドのないスキルは相手に響かず、誰も動いてくれない。かといって、技がないと心が届かず、空回りしてしまう。技術を磨くことも大切だが、個々の参加者を大切に思う気持ち、チームに対する奉仕精神、人としての存在感など、人間性を培っていくことが、ことのほか重要である。

ワークショップの主役は一人ひとりの参加者である。参加者は自分たちで問題解決や学習をする力を持っており、ワークショップを企画・運営する人は、それが促進できる場を提供し、自律的な活動を寄り添い見守るだけだ。Be withこそがワークショップに際しての基本姿勢なのである。

●プロフィール ほり きみとし

堀公俊事務所代表。日本ファシリテーション協会前会長。法政大学兼任講師。大阪大学大学院修了後、大手メーカー勤務を経て、「日本ファシリテーション協会」を設立。ビジネス、市民活動、教育など多彩な分野でファシリテーション活動を展開中。著書に『ワークショップ・デザイン』（日経出版社）などがある。

“あおもり町” 町長選挙の 公報づくり

青森県明るい選挙推進協議会常任委員

渡部 一清



演習課題と手法

積極的に研修へ参加する意欲と態度を育むために、青森県では二〇代の青年を対象とした「ヤングフォーラム」に、早くからワークショップを採用してきた。

平成一六年からは、自分たちの生活や身近な地域課題から発想していくことが政治の原点であると気づき、政治・選挙への関心を高めることができるよう、研修テーマを「政治とくらしの距離はどれくらい?」と設定し、「あおもり町」（想定町）の町長に立候補するための選挙公報づくりを行ってきた。

二日間にわたる演習では、各種統計資料や新聞記事などから想定した「あおもり町」の【概況】、【産業】、【文化・観光】、【インフラ】、【医療・福祉】、【財政】についての解説文を読んで、身近な問題から町全体に及ぶ問題について自由に意見を出し合い、よりよい「あおもり町」にするための議論を重ねて、町長選挙立候補者の政策を伝える「選挙公報」を完成させる。一方、個人としては、「あおもり町」の住人として自分たちの政策と他班の

政策を比較検討し、町の将来を託せる立候補者を選択して投票するというものである。

話し合いの流れ

二日目 一四時～一八時

① アイスブレイクと提示

開会行事に続き、ゲームやクイズで全体の雰囲気をやわらげた後、演習の進め方の説明や資料提示を受ける。

② 自己紹介・役割分担

各班七～八人のグループに分かれてテーブルに着き、和やかな自己紹介をし合ってから、司会者、発表者（町長候補）、記録者などを決める。

③ “あおもり町”の現状把握

“あおもり町”に住む若者の視点と発想で、町の【概況】、【産業】、【文化・観光】、【インフラ】、【医療・福祉】、【財政】の分野ごとに、「優れている、劣っている、問題がある」と思われる箇所を抽出（「抽出課題」し、提案し合う。

話し合いでは、他人の思いつきや意見を批判しない約束をする。また、カード（付箋）を利用する時は、整理しやすくなるように、問題点は赤色、解決策は青色、その他は黄色へ書く約束をする。解説文（三五〇〇字）は事前に参加者へ送付しておく。

④ 「抽出課題」の整理とまちづくりの討議
「抽出課題」の解決策や優先順位、理想とする「あおもり町」について討議を深めながら、「同じような意見、異なる意見、その他」などに分けながらカードを整理し、まとめていく。

各自が提出した「抽出課題」の解決策や優先順位の決定に際しては、重要性や緊急性、実現性、効果などを検討しながら、班の意見にまとめていく。

⑤ イメージ（スローガン等）作成

班内のアイデアや意見を集約して、理想とする「あおもり町」のイメージ（スロー



発表資料のレイアウトについて討論中

ガン、マスコット、シンボルカラー）を作成する。

班として特に重視していく分野を強調しながら、一目で理解できるように工夫する。

⑥政策の立案と選挙公約作成

作成したイメージを実現するための政策を立案し、選挙公約にする。

町長の選挙公約として、地域住民の支持を得られるよう慎重に検討する。

△二日目 九時～十一時半△

⑦政策を掲げた選挙公報（発表資料）作成

文字の大きさや配置を工夫したり、図表やイラストを加えたりして見やすく分かりやすい選挙公報（発表資料）を作成する。町長選挙立候補者は、演説（発表）の準備をする。

応援弁士の必要性や想定問答および他の立候補者への質問も考えておく。

⑧町長選挙立候補者演説会（発表・討論）

各班の発表者が「あおもり町」の町長選挙立候補者に扮して、目指すまちづくりの方向（基本政策）、特に力を入れたい政策（重点政策）、各分野の順位づけに対する考え方などを発表し、質疑応答（討論）に入る。登壇順位は予備くじと本くじで決める。立候補者のタスキや時間合図用ベルも準備する。

⑨投票票と当選証書の交付

選管職員が協力して本番同様の模擬投票と開票を行い、「あおもり町」の町長を選

出する。当選者の出た班全員に当選証書を交付する。

あらかじめ「自分が所属する班からの立候補者へは投票しない」という約束をしておく。投票箱と投票用紙も準備する。当選証書の交付は閉会式で行うことも考える（青森県では閉会式で行い、「政策実現資金」という名目で当選証書に記念品を添えている）。

⑩振り返り

参加青年が開放的な雰囲気の下で様々な地域課題に気づき、伸び伸びと自らの意見を主張できたこと、提出資料の分析や討論を通して政治・選挙に対する関心や地域参加意識の高揚が図られたこと、さらに選挙の意義や投票の大切さを認識し、「生涯投票率一〇〇％」に向けて努力しようという気持ちになったこと、などについて振り返る。ファシリテーターは、全体の雰囲気や和らげて参加青年が発言や作業をしやすいうに配慮するとともに、一人ひとりの積極的な関わりや協力でグループ意識が高まり、深まりのある討論ができるよう支援する（青森県では、より深まりのある討論を期して各班に助言者を配置しているが、押し付けにならないようなサポートを確認している）。

なお、帰宅時間に配慮し、アンケートは郵送またはメールによる提出としている。「ワークショップを通して、選挙と暮らし

が密接に関わっていると実感した」（二〇歳女子学生）、「選挙は分らないことだらけだが、勉強になった」（一九歳女子学生）、「伝統的『三バン型選挙』から『マニフェスト型選挙』への移行の必要性が分かった」（二〇歳男子学生）などの感想が寄せられた。

評価と発展

①ワークショップでの討議や政策をまとめる苦労などを通して、参加青年の仲間意識が育つとともに選挙の意義や啓発活動の必要性を理解するようになるので、発展的な学習やグループ活動へつなげる手立てが必要である。

②青森県外の研修で、「あおもり町」を「開催地の町」に変えて同様のワークショップを行ったり、他の機関が主催する研修会でも試みたりしたが、おおむね好評だったことから、この手法は幅広く活用できるように思われる。

●プロフィール

わたべ かずきよ

公立中学校教諭から社会教育主事として社会教育関係職に24年間勤務、明るい選挙推進運動と関わる。平成17年公立小学校長を定年退職後、青森中央学院大学大学院「地域マネジメント研究科」へ入学、平成19年3月修了。現在、青森中央短期大学非常勤講師。青森市在住。

まちづくりゲームを 活用した常時啓発活動

沖縄県明るい選挙推進協議会委員

新田 繁睦



シチズンシップ教育のためのまちづくりゲーム

投票に行かない若者の声を聞くと、投票はめんどくさい、私の一票でどうにもならない、誰に投票していいのかわからない、などの声が返ってくる。ここ一〇年、沖縄県においても若者の投票率の低下は顕著である。私たちはこのような声を受け止め、なぜ若者がこのような現状であるのか議論した。

その結果、選挙の意義の理解、政策判断能力の二つが欠如しているのではないか。その背景には、学校教育において、政治や選挙について制度や仕組みを教えることはあるが、二〇歳で選挙権を獲得し実際に投票することについて教えることが少ないという現実が見えてきた。

このようなことをふまえ、私たちは、沖縄県選挙管理委員会、沖縄県明るい選挙推進協議会を中心とし制作した市民性教育副読本『小さな市民の大きな力―私たちのまちづくり』のまちづくりゲームを活用し、小中学校、公民館、各種研修に向いて選挙出前講座を行うことにした。

「投票に行きましよう」と呼びかけても、「何のために？」という疑問が残る。私の友人に選挙前に投票に行きましようと言話をしたところ、「最近の二三歳は投票には行かないよ」との答えが返ってきた。同年代でありながら、何のために行くのか理解していない現状にぶつかった。

これまで全国各地で学校等に向いて模擬投票などを行っている先進的な事例は多々あったが、「何のために」という部分で参考になる例はほとんどなかった。そこで私達は、「政治シミュレーション」「政策立案シミュレーション」「投票シミュレーション」の三つの柱からなる前記の市民性教育副読本に目をつけた。これまで、琉球大学教育学部島袋教授を中心として開発に取り組んできたが、短時間でかつ手軽にこの三つの目的が達成できるようにシンプルな形になっている。

この事例を参考にし、琉球大学教育学部の先生方や、教育現場で実践を行っている教員の方々にアドバイスを受けながら、副読本の「まちづくりゲーム」を取り入れ、より取り組みやすいプログラムを作成した。

政治シミュレーション

まちづくりゲームは、ある架空の一〇の集落からなる島を一つのまちとして、ロール・プレイ型のワークショップ（話し合いグループ学習の方式）によって、まちに必要な公共施設を配置していくゲームである。施設には、小学校、下水処理場、ゴミ焼却場、役所、飛行場、運動公園が設定されている。

はじめに、グループの中で一〇の集落の担当者を決める。その次に、まちづくりのビジョン（目標）を決め、島の代表者をグループの中から一名決める。その後、公共施設を配置していくが、はじめは集落代表者として、ごみ処理場等の迷惑施設の設置を拒み、小学校等の生活に有益な施設を自らの集落に配置しようと議論が進む。しかし、各集落の要望に終始して、まとまらない。

そこで意識しだすのが、まちのビジョン（目標）である。はじめに総意で決められたまちのビジョンであるため、各集落の利益よりも、まち全体の利益やビジョンというより高い次元の公共性を求める議論が始まり、合意形成がはかられてくる。これが「政治シミュレーション」である。

参加者に集落の代表になってもらうという意味は、模擬的な議員としてのロール・プレイである。様々な駆け引きを通して各集落に利益を誘導しようとするが、それでは話がまとまらない。まち全体を見渡したときの方向性を再確認することで、全体として有益にな



るような配置に落ち着く。この議論を参加者全員の総意としてまとめていく活動が政治シミュレーションとなっている。

政策立案シミュレーション

次に行うのは、作成したまちの特徴をまとめ政策に転換していくことである。シミュレーションゲームであるため、期間や細かい財源などを含めたマニフェストを提示してもらうことはできないが、簡易なマニフェストとしてまとめてもらっている。どのような方法で実行し、どのような効果があるのかなどを住民に提示することで、自分自身が考えている理想のまちや自分自身が住んでも安心できるまちを判断する基準として作成する。これが政策立案シミュレーションである。

投票シミュレーション

三番目に行うのは、一連のまちづくりゲームから立案したマニフェストをもとに立会演説会を行い、模擬投票することである。各グループの中から選ばれた代表者に立会演説会を行ってもらう。その際に、政策判断をするためのワークシートに気づいたことを記入し、判断材料とする。その後、本物の投票箱・記載台を使い模擬投票を行うのだが、特に自分のグループの代表者に投票してはいけないということではなく、政策を判断して投票

することを促し、投票する。

これが投票シミュレーションである。ただ投票するのではなく、政治シミュレーションや政策立案シミュレーションと連動し、地域の様々な課題を解決するために、自らが主体的になって課題を発見、原因を追及、解決策を立案し、政策判断しやすいマニフェストに転換することによって、これからのまちづくりのための一票になることを体験してもらうことがねらいである。

まちづくりにおけるファシリテーター

地域づくりは、有限な資源（お金、環境、人等）の中でその活用について合意形成をはかっていくこと、すなわちこれが政治であり、「社会的諸価値の権威的配分」が行われる。それは民主社会の権威（合意の源泉）が「みんなの納得」に生まれることを実体験することが、本プログラムの本質的な目的となっている。「みんなの納得」を得るためには、はじめは自らの集落に有益な形になるように議論を展開していくが、一人ひとりが地域の一員として全体のことを考え、意見が集約していく。この過程が、グループでの総意を作り出していくために、参加者全員がファシリテーターとしての能力（話し合いを促進する力）を身につけていく過程と重なってくる。

ファシリテーターに必要な力とは、①テーマを理解し共有する、②思ったことが言える雰囲気をつくる、③考えや思いを意見として引き出す、④意見をつなげるために本質をつ

かむ（違う意見を共通する別の言葉で置き換えてみる）、⑤一人ひとりの意見を全員で共有する^注、の五つであり、これらの力を身につけていくことが重要である。これは本プログラムのみならず、様々なワークショップや地域づくりの現場などにおいても、「みんなの納得」で話し合いを進めていくために必要な力である。これこそ、民主社会の政治的主体、「市民」が持つべき最も重要な力だと思ふ。

本プログラムでは、二時間という短い時間の中でこのまちづくりのシミュレーションを通して、ファシリテーションの能力の一端しか垣間見ることしかできない。しかし、このようなことを通して、主体的にまちづくりに取り組む市民を育てることを柱としており、今後も様々なテーマで老若男女問わず、ワークショップを展開していきたいと考えている。

（注）島袋純・里井洋一監修『地域づくりを担う力を育てる』（琉球大学教育学部、二〇〇八年三月）四八～四九頁

●プロフィール

あらた しげちか (24歳)

平成19年琉球大学教育学部卒。在学中に島袋ゼミに所属し、附属中学校での市民性教育、南風原町子ども議会の指導に参加。その際に市民性教育を学び、ボランティアとしてVOTEで常時啓発活動を担当。これまで、沖縄県内小・中・高校、公民館での指導、県外での研修での講師を担当している。その他、市民活動に数多く取り組んでいる。民間企業職員、一児の父。

ワークショップ 「選挙と社会生活」

創造性コンサルタント・グループ代表 小川 義則



基本コンセプトⅡ選挙（や政治）についての意識の再構築

人間は考える葦ともされます。一方で、この「考える」ことの不在が「あなたまかせ／あてがいぶち」を招き、これが、それぞれの社会性の欠如だけでなく、社会全体の健全な成り立ちを妨げる要因ともなります。

明るい選挙推進協会や奈良県選管主催の青年対象の研修会で私が講師を務めて行ったワークショップは、「選挙と社会生活」を基本テーマに、参加者それぞれの使命や「働き」について、この「考える」場面を提供し、その取り組みを通じて、選挙（や政治）についての意識の再構築を図ろうとするものでした。

ワークショップ

「選挙と社会生活」の特徴

このコースの特徴として、以下の三点をあげることができます。

（１）仕事を事例とする、ということⅡそれぞれに、その気持ちややり方は異なるにしろ、われわれはそれぞれに「働き」を持ち、この

作用・機能が仕事とされます。しかも、仕事は選挙と同様にそれぞれの社会生活のための手段であり、また日々の生活にとって大切なものといえます。このように選挙とも共通性を持ち、かつ、より身近な存在である仕事を事例とすることにより、「考える」にあたつての「考えやすさ」をガイドすることができます。

（２）目的志向の重視、ということⅡ物事への興味や関心、また意識の再構築は「なぜ」と「考える」ところから期待することができず。そして、この「なぜ」には原因志向型だけでなく、目的志向型もあり、この「何のため」と「考える」ことが、それぞれに「考え直す」ための有効な手だてとなります。このワークショップは、日々において、ややもすると忘れがちとなる、この目的志向の「なぜ」を重視します。

（３）慣れの払拭が期待できる、ということⅡそれぞれの考えや日常行動のほとんどは、慣れやその習慣に従うといっても過言ではありません。ただし、その連続や積み重ねがマンネリ感や惰性を招き、ここから新たな気づきを求めることは困難となってしまう

す。ここに「あえて「考える」ということの大切さがあり、また、その取り組みからわれわれは新たな視座・視点を獲得します。これが意識の再構築への第一歩ともいえるでしょう。

基本ステップと進め方や内容の概要

それでは、次にステップごとの進め方や内容についてお話ししましょう。

ステップⅠ 導入実習…仕事と社会生活

〔時間Ⅱ―ⅠH〕

われわれは社会生活の手段として、それぞれに「働き」を持ち、これが仕事であり、それぞれの職務ともいえます。この仕事を例に「われわれが、その「働き」を怠るとしたら、どのような状況が生じるか」「われわれの「働き」はわれわれ自身（や、そのチーム全体）にとつて、何のためのものか」「われわれの「働き」はつねに問題を発見し解決していく取り組みが求められる。その理由とは」等を設問としたQ&Aシートに従い、まず個人研究に取り組みます。さらに、この解についての認識の欠如・不足や曖昧さがもたらす状況についての班別討議を行います。これらの個人研究、あるいは討議内容の発表を通じ、仕事における当事者意識や問題意識の重要性、また、いかなる物事も目的を持ち、この目的意識がやる気だけでなく、やり甲斐の源泉であるということについて確かめていきます。

ステップⅡ 班別実習…テーマについて「考

える」〔時間Ⅱ―2H〕

その1…目的について〈考える〉Ⅱそれぞれの社会生活を前提に「何のために選挙への興味や関心を広げ、その意識の向上が必要か」とその目的についての班別討議から始めます。討議の進め方として、ブレインストーミングやブレインライティングなどがあります。なお、より具体的、かつ多く、そして、「〽を〽するため」と表現すると、よりわかりやすくなります。引き続き、事柄相互の関連性や共通性から、六〇八項目程度に文章化し、模造紙に記入していきます。この目的のまとめにより、選挙や政治の意義、およびこれらとわれわれの社会生活との関連性が明確となっていきます。

その2…手段について〈考える〉Ⅲその1の目的（六〇八項目全体）を前提に「選挙への興味や関心を広げ、その意識の向上を図るためには」とその手段についての班別討議を行っていきます。討議の進め方として、個人それぞれの経験談、あるいは実際に取り組んでみようとする事柄などを中心としたフリートークが好都合です。ここでは「〽を〽する」と表現し、取捨選択することなく（これらのやり方・方法はそれぞれの選択によるため）、模造紙に記入していきます。なお、これら記入した事柄が、それぞれの今後の啓発課題となります。したがって、提案や提言などに類する事柄はここでは排除します。

ステップ3 班別実習…我々のあり方について〈考える〉（時間Ⅱ2H）

その1…テーマからの自由発想Ⅱステップ2のその1と2の組み合わせ、つまり「〽を〽するために〽を〽する」、その当事者として、われわれのあり方について、討議の準備から始めます。進め方として、基本テーマの構成要素である「選挙」および「社会生活」をキーワードに、ここから思いつく名詞・動詞・形容詞など、より大胆かつ多様に自由発想し、それぞれについて、二〇項目以上を模造紙に記入していきます。なお〈考える〉とは「想像する」という意味を持ち、いわゆる発想の転換や、短絡的考えの防止は、このイマジネーションの発展や展開が大切な役割を果たします。

その2…われわれのあり方についてのコメントⅢステップ2の実践に向けたわれわれの日々のあり方、つまり、地域青年リーダー、あるいは明るい選挙推進のサポーターとして、その「ある（べき）姿」の討議と決定に取り組みます。実践への自主（自発）性は、このあり方についてのコメントメントからといえます。この部分の進め方として、その1のフレーズを素材・ヒントにスローガン、またはテーマソングとして作詞（替え歌で発表）します。なお、各フレーズは必要に応じ、そのまま使う、勝手に加工する、不足を追加するなど、いずれも自由に進めます。

ステップ4 発表と補足講義…総括コメントと実践ガイド（時間Ⅲ1H）

班別実習それぞれについて、模造紙による発表と評価を行います。ステップ2について

は、班内での話し合いの状況、特に結論に至ったプロセスを交えて発表していきます。ステップ3は、それぞれの作品の意図の解説と共に発表することが大切となります。その後、各班相互の投票による評価と順位づけをします。評価基準として、各ステップごとのテーマとの整合性、および日常における実践性などが考えられます。引き続き各班の発表内容に従い、日々の社会生活との関連性などについて確かめてみます。ワークショップでの気づきの実践は、それぞれの社会生活や、その日常性への反映からといえます。

意識の再構築への気づきは、そのテーマについて〈考える〉ところから始まります。しかも「気づく」は「築く」に通じます。それぞれの仕事や対人関係をはじめ、われわれ自身の社会生活に関わるすべては、与え（教え）られるものではなく、それぞれに築くものといえます。このワークショップ「選挙と社会生活」は、これら「気づく／築く」ための考え方として、そのマインドや術（すべ）を獲得していくための舞台（ステージ）と位置づけることもできるでしょう。

●プロフィール

おがわ よしのり

昭和20年生まれ。経営コンサルティング会社の企画部門を歴任後、昭和59年4月創造性コンサルト・グループを設立。同代表として現在に至る。「人」を活かす組織をつくる／自己を活かす「人」をつくる——を基本テーマに、行政や公益諸団体、企業等でのセミナー講師、人材育成諸活動に従事。

学校をコミュニティに 「生徒会」活動

梶山女学園大学准教授 山田 真紀

小学校での実践

以下に小学校と中学校の事例をご紹介します。

われわれが訪問したストラスブール市にあるジャン・フィッシャー小学校では、学級ごとに、生徒代表を民主主義の選挙を模して選出していました。選挙日の一週間前に各学級で立候補により候補者を決め、候補者は選挙のルール、生徒代表の役割、仕事の内容について

の説明を受けたあと、自己紹介と選挙公約を発表します。投票日には教師は投票用紙を配布し、子どもたちは候補者の名前を書いて投票します。結果発表においては、教師は当選できなかった子どもの気持ちに配慮しながら対応します。こうして各学級から生徒代表と、生徒代表に事故あるときに代役を務める生徒代表代理を各一名ずつ選出します。

生徒代表は月に一回、月曜日に開かれる生徒代表協議会に出席します。生徒代表協議会には全学級から学級代表が集まり、各学級であらかじめ話し合われた議題について取り上げ、議論をします。これまで生徒代表協議会では、①授業時間外に起きた喧嘩などのトラブルを解決し、解決できないときに先生を呼びにいく「仲裁活動」を導入すること、②校内美化のためのゴミ拾い活動を行うことを決めるなどしてきました。その他、生徒代表協議会は、復活祭などの催事に際して学校内の飾り付けも行います。

生徒代表協議会の流れ、すなわち、各学級から意見を集約し、その中から生徒代表協議会で諮るべき議題を選び、発言したり議論し

たりする上で守るべきルールを徹底し、そこで決められたことを各学級にもちかえり、実行に移すという一連の流れは、過去四年間の試行錯誤を経て、現在の形となったものです。

その中で、子どもたちは自分の抱える問題や要望を適切な方法で教師や学校に伝える力、議論や意思決定についての民主的な方法、自律性や責任感をもって行動することなどを習得することができ、この活動を通して、暴力やルール違反などの学校生活の問題を減らすことができました。

教員は生徒代表協議会に先立ち、学級で出された議題や要望を持ち寄り、担当教員がどのように



生徒代表協議会の様子（小学校）

回答するかを準備しています。

最高学年（日本の小学五年生に相当）の生徒代表は、三カ月に一回開催される保護者代表会議にも出席し、高学年の生徒代表（日本の小学四・五年生に相当）の生徒代表は、学校の代表として地域評議会にも出席します。地域評議会とは、二〇〇三年度に創設されたもので、市長も出席するこの会議において、会議開始後の三〇分間に、生徒代表に発言の機会が与えられます。学校が大きな道に面しているため、子どもの安全がおよびやかされていることについて発言したにより、学校の前に運転手に注意を促す標識を設置し、近隣の住民に注意を喚起するための手紙を送るなどの措置が講じられたこともあるそうです。

われわれが訪問した五つの小学校のうち四校で児童会に類する組織がありました。われわれが訪問調査と並行して実施したフランス全土を対象とした質問紙調査によると、中学校ほどは一般的ではないようです。

コレージュにおける実践

一方、コレージュ（中学校）では、生徒代表の選出と生徒代表協

議会の設置は一般的に行われています。生徒代表の選出は、生徒に責任感やリーダーシップを身につけさせることを目的としており、主に、生徒指導主任専門員がその養成を担っています。

われわれは、パリ市にあるコレージュ・モーリス・ラベルにおいて、生徒代表協議会の様子を参観することができました。会議には全学年全学級からそれぞれ選出された生徒代表各二人、予備の生徒代表二人、校長、教頭が出席します。今年度はこれまで、①学校管理評議会に伝達する生徒の要求項目の整理、②壁の張り紙防止運動や校内暴力反対運動などの推進についての議論を行ってきたそうです。参観した日は、校則の修正事項の報告と確認作業を行っており、ある生徒代表は「『生徒は互いに尊重する』という前文から、『生徒は』の文言を削除すべき。互いに尊重することは生徒に限らず、学校にいるすべての人が守るべきものであるから」と主張していました。

さらに生徒代表のうちから選出された生徒は、学校管理評議会にも出席します。学校管理評議会とは、校長、教頭、教員、生徒代表、

職員代表、保護者代表、自治体責任者が出席して、学校規則や学校計画について話し合うものです。

この学校では、中学校で学ぶ四つの学年のうち高学年に属する生徒代表のうち二人が選ばれて、この会議に出席しています。これまでに生徒からの要望として、女子トイレに鏡を設置してほしい、食堂にラジオ放送を流してほしい、学習机をもっと高くしてほしいという意見を伝えてきました。

また、生徒代表は、学級評議会と、必要があれば懲戒評議会にも参加します。学級評議会とは校長または校長補佐、学級担任、学級を担当する教科担任、生徒指導主任専門員が集まり、学期末に生徒の成績について協議し、また、生徒が学級担任や教科担任に要望を伝える会議であり、懲戒評議会とは、繰り返し重大な問題を起した生徒について、校長、教頭、教師、問題を起した生徒、その保護者が出席して、今後の対応を話し合う会議のことです。

*

実際に小中学校を訪問して、「児童協議会」「生徒代表協議会」について調査し、印象的であったのは、次の二点です。

第一に、シティズンシップの教育やデモクラシーの教育という文脈で、必ず「生徒代表の養成」が言及されたことです。コレージュでは、学級代表として必要な技能を身につけさせるために、生徒指導専門員からの支援を受けるだけでなく、市内のコレージュの学級代表を集めてリーダーシップ養成ワークショップをひらくなどしていました。これらの活動を通して未来のリーダーを養成することに力が注がれています。

第二に、生徒代表協議会において、子どもたちが日常生活に関する要望や問題点を、正直に教員にぶつけていたこと、そして生徒代表が学校の管理運営や地域社会の運営に関わるような重要な会議に出席し、子どもたちの要望や意見が実質的に生かされる場が確保されていることです。自分が直面している問題が解決され、提案した要望が通るかもしれないという希望がもてるのであれば、子どもたちは、学級での話し合いや生徒会活動に積極的に関わろうとするでしょう。

この点は活動が形骸化せず、活気のあるものとなっている重要なポイントになっています。

自在に仕事ができる言葉力の鍛え方

言葉と現実の一致を心がける

中央大学専任講師 伊藤 章雄

言葉の力は「裏打ち」から

言葉は、それ自体は無力な存在である。お金のように物が買えるわけではない。パンのように食べられるわけでもない。けれども、現実には言葉が人間関係を動かし、売買契約を成立させる。恋愛や結婚さえ、その第一歩は言葉の交換に始まる。私たちの生活、人生は言葉の力なしにはやっていけない。

言葉の力は、どこから湧いてくるのか。それは「裏打ち」からである。たとえば、私たちが気軽に電話や口頭で人と会う約束をするのは、相手が必ず来る、時間を守るという信頼関係に裏打ちされるからだ。政治家と国民の間も同じである。約束を守る人、という信頼関係を国民との間に築いた政治家は政治生命も長い。言葉の力の源泉が裏打ちによっていることを端的に示すのは、法律だ。法律は言葉でできている。法律に違反して罪を犯せば、警察に逮捕され、裁判にかけられる。有罪となれば有無を言わず監獄に入れられる。警察や司法の強制力が、法律に力を与える。

次に言葉が力を持つにはシンプルに言葉を使うことが重要である。シンプルとは、同じことを言うならできるだけ短く言う、ということだ。ずいぶん前になるが、朝日新聞の天声人語に「どさ」「ゆさ」という会話が紹介されていた。「どこへ行くのか」「湯に行くのだ」というのが会話の意味だった。また、一〇月一五日の日本経済新聞の春秋に最も短い日本語の会話として、「け」に対して「く」と返す、とあった。「食べなさい」「食べますの」の意味だそうだ。長くしゃべっていると雪が口に入ってしまうかららしい。日本語の豊かさや膨らみを再発見する、とあった。

同じコラムの最後に、「一方で政治家の言葉の軽さが指摘される。が、政治は刃の代わりに言葉を使った戦いだ。寡黙は困る。言葉

を尽くして説明してほしい問題が多い。」と結んであった。

仕事の文章や言葉には力がなくてはいけない。必要最小限に言葉を惜しむとき、一語にこもる伝達エネルギーは最大になる。言葉は増やすほど説得力が弱まる。

災害現場等の緊急を要する場合の指揮、命令、コミュニケーションの要諦は「シンプル」であることだ。シンプルこそ言葉のエネルギー活用鉄則である。ただし、言葉足らずは問題外である。

力の根源は実効性にある

力の根源は実行性にある。美しい言葉で書かれていても、絵空ごとには誰も振り向かない。ふだんうまい文章というとき私たちは、内容の整理、話の運び、論理の通り方、歯切れのよさやリズム感、色彩感などに着目する。それらがそろった文章をうまいという。テニオハが正確である、何より言うべきことがきちんと書かれている、となれば完璧だと思う。あの人は達意の文章を書く、わかりやすい話をする、と評価する。

しかし、言葉や文章の本当の価値は、繰り返すが、内容の実現可能性にある。映画などの名セリフ、たとえば戦後映画の傑作「カサブランカ」の主役ハンフリー・ボガードが馴染みの客と交わす会話。「昨晩はどこにいたの?」「そんな昔のことは覚えていない」「今

夜会える?」「そんな先のことはわからない」などは実に味があり面白い。言葉遊びとしては最高だ。シェークスピアの「ハムレット」にでてくる「生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ」というセリフも、見事である。けれども所詮は浮世離れした表現である。後世に語り継がれる名セリフであるけれども、ビジネスの世界には通用しない。面白さだけでは現実には一円のお金も動かないからだ。

改めてもう一度言うが、言葉が人を行動に駆り立てるのは、言葉に対応する現実が確かにあり、そこに信頼関係が成立し、あるいは実行力ないしは強制力が準備されている場合だけだ。これがビジネスにおける言葉や文章の「リアリティ」の正体だ。

要するに、言うことと現実が一致しない、実際に人やモノが動かない文章や言葉はむなしくて駄目だ、ということだ。その典型の一つが広告文であろうか。実は最近までそう思っていた。が、注意してコーマーシャルを見てみると必ずしもそうではないことがわかってきた。現実との対応のある広告コピーが目につくようになっていく。実は、現実と言葉の一致ということを筆者に明確に意識させてくれたのは、次の広告コピーだ。

言葉と現実の関係

観音様で知られる浅草に仏壇通りなる街路がある。両側にずらっと仏壇屋が並ぶ。その

中に「仏は形を求め、形は心をすすめる」という宣伝看板を掲げた店があった。現実と言葉、形と心の対応関係を見事に表現したコピーだ。

画家がモデルを使うのは意識の集中のためだともいわれる。形がなければ思わない。形を前に思いはすすむ。これが人間というものだ。神社や寺院に神像、仏像、宗教絵画等があるのは、信仰心の深化と成熟への方法、さらに戦略、戦術でもあるのである。

私たちは「この文章にはリアリティがある」と思うことが度々ある。言葉が現実と対応したときの訴求力、説得力を指している。企画書や計画書、調査研究レポートなどはほぼ言葉や文字で作られるが、そこから読み取るのは、そのリアリティだ。

では、現実と対応するリアリティのある文章表現をどうして身につけるか、である。この問いに対する答えは唯一つだ。文章を書きながら、そういう現実が存在するかと、つねに言葉との対応を確かめることだ。「皆は反対するが、賛成者も少なくない」と書くとする。この場合、具体的に一定数以上の賛成者の顔が浮かばなければならぬ。浮かばなければ、「……と、期待している」とつけ加えなければならぬ。

おぼろげな記憶、先入観、期待を交えた推測、あやふやなメッセージを発することは、ある意味で犯罪である。ガイドブックなどにも伝聞や推測に基づいて書かれたものが中に

はある。現場に行ってみて、書かれていることが過大評価だったり、数年前のことだったということも現実にはあるのである。山岳ガイドブックなどは、命にも関わることなので、信頼のおける十分な踏査によって書かれたものを使用しなければならない。

イベントへの参加者が一〇万人に達した、と主催者が実績報告書に記録しながら実は数えていなかった、という例もある。現実との対応関係が証明できないときは、そのことにふれるべきではない。文章はつねに現実と等価であること、一から十まで説明のつく具体性によって裏づけられなければならない。

人間性を磨こう

最後に、現実との対応が人を傷つけることがあることに注意すべきだ。風評被害発生の引き金になったりすることもある。最近の事件では汚染米を原料にした和菓子屋等の店名をマスコミが公表した。記事はリアリティを持ったが、和菓子の売れ行きは止まったという。被害者が二重の被害者になってしまった。

現代社会では、配慮に欠けた文章と現実との一致が裏目に出ることがあるのだ。言葉は現実と対応することにより力を持つが、書き方には十分な注意が必要だ。バランスのとれたいい文章を書くには、人柄を良くすることもある。文章の価値を究極的に決めるのは、人間の品格なのだ。

このコーナーでは全国各地の選挙啓発に関する取り組みをレポートします。

東京都品川区

区長と新成人立会人経験者の懇談会を開催

品川区明るい選挙推進協議会は、九月二四日(水)、新成人の立会人経験者と濱野健・品川区長との懇談会を開催しました。

若者の投票率が低いことは全国的な傾向ですが、選挙を身近に感じ、投票率の向上につながるよう、区明推協は、選挙のつど、各投票所の投票立会人に必ず一人新成人をお願いすることにしています。これらの若者の声を聞くために、立会人経験者との懇談会をこれまで五回行ってきましたが、集まりが二、七名と悪いので、その開催方法について模索していました。ある会合で、濱野区長が若者と直接話す機会を求めていることを知

った区明推協は、区長の快諾のもと、区長と経験者との懇談会を企画、過去四年ほど遡って経験者に参加の呼びかけを行いました。

当日は、大学生・大学院生、社会人など一四名が参加しました。議事は、石井恒男区明推協会長の開催に至った経緯や会の性格の説明、参加者の自己紹介の後、濱野区長が、品川区の特長や教育問題、進む少子高齢化など、区政の現状についての報告を行いました。

区長への質問コーナーでは、おもに福祉や教育問題について参加者から活発な質問がなされ、区長からその一つひとつに回答がありました。また、選挙での若者の投票率が低いことについて、「PR不足ではないか」「就職活動時に利用したインターネットでの適正



判断テストを政党や候補者選びに「使えないか」などの意見も出され、区長からは「いけばん身近であるはずの

市区町村の選挙投票率が一番低いのは、自治体の首長として悔しい」との発言がありました。

会は時間を延長して熱心な意見交換が行われ、石井会長は、「今回の懇談会は、大多数の参加者から次回も参加したいとの意思表示がありました。出席者も多く、若者の区政や選挙に対する率直な声を聞くことができました。今後、今日の反省点を生かしながら、この会を継続的行っていききたい」と総括されました。

宮崎県

「わけもんの主張」始まる

宮崎県は、二〇歳代前半の青年が選挙や政治に関して日ごろ考えていること、求めていることを五分程度で述べる「わけもんの主張」を開催しています。新成人を対象に新有権者意見発表会として開催したものを衣替えし、対象年齢を拡大して平成一八年度にスタートしました。今年で三回目の大会です。

主催者には宮崎県明推協、宮崎県選挙のほかに宮崎県学生選挙サポーターが加わり、審査員や司会を務めています。

県内七地域で発表会が開催されて各地区の代表が選ばれ、一月開催の県大会に参加します。

今年のテーマは「有権者となつて感じた政治について・選挙について」で、成人としての認識を深め、有権者としての責任感や明るい選挙推進運動に対する意識の高揚を図ることが目的です。

十一月二九日には県北六市町村の代表七人が集う東臼杵支会大会が開催され、選挙啓発のボランティアグループ「ミニ選挙管理委員会in延岡」副会長の小野育恵さんが延岡市代表として参加しました。小野さんは、「ミニ選活動を通じて見えてきたこと、ミニ選活動を通じて選挙の大事さ、そして積極的に携わることの素晴らしさ」を述べて優秀賞を受賞しました。県大会は、来年一月一七日に開催されます。

山口県

「青年法政大学防府会場」終了

山口県選挙管理委員会と明るい選挙推進協会は、地域活動と明るい選挙・政治を支える青年リーダーを育てるため、毎年「青年法政大学」を県内四カ所(周南会場、

防府会場、宇部会場、下関会場）で開催しています。

内容、開催期間等は会場ごとに違いがありますが、①大学教授、NPO関係者、女性起業家、カウンセラーなど様々な分野で活躍中の方の講義により、政治・社会その他一般教養について学ぶことができる、②合宿や他の会場との交流会など、いろいろな人と知り合うことができる、③受講生が自主研究グループを作って研究発表を行い、その成果としての研究発表が行われるなど、青年指導者研修の全国的なモデルになっています。また、青法大の運営に受講生OBが積極的に参加していること



も特徴の一つです。

防府会場では公民館を会場に、六月一八日から十一月九日の間の毎週水曜日一九時から二十一時三〇分までの日程で行われ、二六人が受講しました。「地域資源を利用したスモールビジネス」「ゴミを考える・ドイツの例」「星紀行・自然環境を考える」「棟梁が語る・生まれ変わった錦帯橋」「被害者参加制度」「防府会場OBによる選挙についての講義」など多彩な講義が行われ、また、受講者が三班に分かれての自主研究を行いました。

十一月九日に研究発表大会が開催され、投票により第一班の「車社会 山口」が選ばれました。ガソリン高騰に問題意識を持ち、車に頼らざるを得ない現状を検証し、車に頼らなくても生活できる仕組みを提案しました。資料を調べるだけでなく、エコドライブの実践やノーマイカーデーへの参加、車を使わない人への調査も行いました。第一班は十二月一四日に行われる、四会場代表が集まる県発表大会「クリスマストークマッチ」に参加します。

秋田県

「アキタ・アフリカフェスティバル」で呼びかけ

秋田にいながらアフリカを知り、考え、学び楽しもう！というコンセプトのもと、大学生主体のグループ「秋田キャンパスネット」などが中心となって、七月に秋田市内で「アキタ・アフリカフェスティバル」が開催されました。講演やステージショー、アフリカ学習の成果発表、写真やパネルの展示、民芸品やフード・ドリンクのブース出店が行われ、その一角に「アフリカ各国の選挙事情を調べると共に、日本の選挙についても考えてもらおうきっかけにしよう！」と、アフリカの選挙ブースがつくられました。

選挙ブースを企画したのは田口美喜子さん。秋田県明推協がこの四月に、活動に若い世代の意見を反映させようと「秋田キャンパスネット」のメンバー二人（二〇歳代）を委員に委嘱したうちの一人です。田口さんは、啓発活動をするいい機会だと考え、キャンパスネットのメンバーに呼びかけてこの企画を実現しました。

事前に秋田市に暮らすアフリカ人や、アフリカに派遣されていた青年海外協力隊のOBなどに各国の政治体系や選挙の仕組み、様子などをインタビューしました。展示のほかに、アフリカの社会問題を基にした架空の議題を設け、三人の候補者とその公約による模擬選挙「架空の国カリファ共和国の大統領選挙」も行いました。

参加したスタッフも、フェスティバルの来場者に意欲的に模擬投票を呼びかけ「今まであまり関わりのなかった選挙について身近に考えることができた。今年から選挙権を認められる年齢なので、自分の持つ責任を果たしたい」と感想を述べています。



明るい選挙啓発ポスターコンクール

大臣賞決定

財団法人明るい選挙推進協会と都道府県選挙管理委員会連合会は、全国の小学校、中学校、高等学校の児童、生徒を対象に、今回で第六〇回目となる平成二〇年度明るい選挙啓発ポスターコンクールを実施しました。

このコンクールは、明るい選挙推進協会と都道府県選挙管理委員会連合会が主催し、全国の都道府県選挙管理委員会及び市区町村選挙管理委員会が共催者となり、文部科学省、総務省および全国の教育委員会の後援のもと実施されました。

コンクールの目的は、明るい選挙を実現するためのポスターをかくことで、将来の有権者である児童生徒に選挙、政治への関心を持ってもらうきっかけを作ることです。児童生徒は作品を制作するに当たって、まず「明るい選挙」ってなんだろうと考えるでしょう。学校で先生と、家庭で親と「明るい選挙」について話し合うことでしょうか。また、全国各地で応募作品の展示会が開催されますので、一般の有権者やプレ有権者に対する「明るい選挙」の啓発手法としても大変効果的だと考えられます。今年度の応募学校数は八六二六校で、応募者数は一三万五二七人でした。昨年

より若干減少しましたが、高校生からの応募は、学校数、生徒数ともに増加しました。また、ところによっては、明るい選挙推進協議会の委員も、作品募集の依頼のために学校を訪問したり、審査員に加わるなど協力いただきました。

審査は市区町村で第一次審査が、都道府県で第二次審査が行われ、一〇月二三日、第三次審査が東京において行われました。都道府県から出品いただいた九〇〇作品の中から、文部科学大臣・総務大臣賞（連名）一八作品、財団法人明るい選挙推進協会・都道府県選挙管理委員会連合会会長賞（連名）六〇作品を決定しました。大臣賞・会長賞には表彰状と副賞を贈り、第三次審査出品者全員に記念品を贈りました。

今年度から第三次審査への出品上限数を変更したところ、昨年六三八であった中央審査への出品数が九〇〇に増えました。それに伴い会長賞の数を三九から六〇に増やし、応募してくれた児童生徒の努力に少しでも応えることといたしました。

なお、大臣賞作品・会長賞作品は、明るい選挙推進協会のホームページで見ることができます。

(www.akaruisenkyo.or.jp)

文部科学大臣・総務大臣賞（18人）

	氏 名	都道府県	学校・学年		氏 名	都道府県	学校・学年
小学校	竹田 栞菜	奈良県	橿原市立真菅北小学校 1 年	中学校	服部 春香	宮崎県	宮崎市立東大宮中学校 2 年
	小林 龍平	栃木県	那須郡那須町立黒田原小学校 2 年		小笠原 美結	愛知県	豊橋市立中部中学校 3 年
	山本 円花	群馬県	館林市立第十小学校 3 年		瀬尾 友美	徳島県	阿波市立土成中学校 3 年
	木下 真惟子	愛知県	豊橋市立多米小学校 4 年	高 校	住田 沙紀	兵庫県	県立香寺高等学校 1 年
	大橋 真実	兵庫県	南あわじ市立市小学校 5 年		与那嶺 利沙	沖縄県	県立浦添工業高等学校 1 年
	齋藤 海峰	栃木県	塩谷郡高根沢町立東小学校 6 年		杉下 芙由子	石川県	県立工業高等学校 2 年
中学校	杉本 茉織	東京都	国分寺市立第一中学校 1 年		永原 沙樹	福岡県	学校法人冲学園 冲学園高等学校 2 年
	弓場 麻名輝	静岡県	県立浜松西高等学校中等部 1 年		川西 友菜	香川県	県立高松工芸高等学校 3 年
	鎌形 佳世	千葉県	香取郡多古町立多古中学校 2 年		杉園 朗子	鹿児島県	県立川内商工高等学校 3 年

平成20年度（第60回）明るい選挙啓発ポスター作品 応募状況

都道府県		応募学校数				応募者数				中央審査提出数			
		小学校	中学校	高 校	計	小学校	中学校	高 校	計	小学校	中学校	高 校	計
北海道東北	北海道	16	24	2	42	221	305	3	529	3	4	0	7
	青森県	13	26	5	44	83	297	29	409	3	3	3	9
	岩手県	112	49	8	169	1,720	409	93	2,222	11	5	8	24
	宮城県	114	77	1	192	295	629	5	929	3	5	0	8
	秋田県	14	18	1	33	103	85	2	190	2	3	1	6
	山形県	94	55	2	151	900	860	11	1,771	7	7	2	16
	福島県	59	46	7	112	188	263	54	505	3	3	3	9
関東甲信越静	茨城県	267	145	2	414	1,602	1,696	17	3,315	11	11	2	24
	栃木県	252	112	4	368	1,664	862	10	2,536	11	7	1	19
	群馬県	212	141	5	358	2,933	4,515	181	7,629	5	6	2	13
	埼玉県	322	122	12	456	6,592	2,788	75	9,455	23	14	7	44
	千葉県	257	100	9	366	1,274	905	13	2,192	9	8	2	19
	東京都	369	262	20	651	7,341	7,409	381	15,131	25	25	18	68
	神奈川県	113	88	6	207	1,454	972	13	2,439	10	8	2	20
	山梨県	92	58	2	152	1,997	1,585	25	3,607	12	10	2	24
	長野県	154	55	8	217	3,498	631	21	4,150	15	6	3	24
	新潟県	32	22	0	54	234	130	0	364	3	3	0	6
	静岡県	206	117	17	340	1,679	1,439	314	3,432	10	10	5	25
東海北陸	富山県	55	51	6	112	334	610	75	1,019	4	6	7	17
	石川県	27	16	6	49	107	56	122	285	3	3	9	15
	福井県	60	46	1	107	610	790	1	1,401	6	7	1	14
	岐阜県	72	51	6	129	748	414	75	1,237	7	5	7	19
	愛知県	734	319	16	1,069	7,312	9,993	344	17,649	25	29	17	71
	三重県	77	52	4	133	586	1,037	14	1,637	6	9	0	15
近畿	滋賀県	31	26	1	58	360	649	1	1,010	4	6	0	10
	京都府	95	40	7	142	1,555	441	65	2,061	10	5	2	17
	大阪府	148	70	9	227	3,713	3,253	279	7,245	15	13	13	41
	兵庫県	309	142	19	470	3,184	4,189	176	7,549	16	18	11	45
	奈良県	45	36	5	86	732	457	22	1,211	5	5	3	13
	和歌山県	17	16	8	41	351	93	85	529	4	3	7	14
中国	鳥取県	1	8	1	10	1	64	1	66	1	3	1	5
	島根県	9	12	2	23	138	376	4	518	3	4	1	8
	岡山県	33	24	3	60	45	187	8	240	3	3	1	7
	広島県	53	30	6	89	1,144	633	58	1,835	5	5	3	13
	山口県	53	31	2	86	141	161	4	306	3	3	1	7
四国	徳島県	118	48	5	171	838	906	16	1,760	7	8	2	17
	香川県	111	41	3	155	721	1,048	114	1,883	7	9	9	25
	愛媛県	126	56	5	187	661	596	51	1,308	6	6	6	18
	高知県	11	17	0	28	112	288	0	400	3	3	0	6
九州	福岡県	170	90	16	276	6,271	6,159	213	12,643	20	20	10	50
	佐賀県	59	44	7	110	744	933	25	1,702	7	8	3	18
	長崎県	38	45	6	89	94	311	88	493	3	3	7	13
	熊本県	49	21	2	72	175	228	4	407	3	3	1	7
	大分県	51	30	7	88	552	309	64	925	6	4	6	16
	宮崎県	64	29	3	96	212	269	23	504	3	3	3	9
	鹿児島県	40	30	3	73	94	459	20	573	3	5	2	10
	沖縄県	20	36	8	64	363	911	52	1,326	4	8	3	15
計 合 計		5,374	2,974	278	8,626	65,676	61,600	3,251	130,527	358	345	197	900

絵本

尾崎行雄

第4回 普通選挙法成立を目指して

illustration 東 芳純

人生の本舞
人海を、将
来ふたり
共に見る



1912年から26年にかけての大正期は、産業の発展、世界的なデモクラシーの風潮を受け、自由主義、民主主義的風潮が広がり、大正デモクラシーと呼ばれた。



1912年、尾崎行雄は10年間務めた東京市長を辞した。当時は、長州・陸軍出身の桂太郎と、公家出身の政治家・西園寺公望・立憲政友会総裁が10年以上に渡って交互に内閣を組織し、桂园時代と呼ばれていた。



同年末、第2次西園寺内閣は、軍拡を巡って陸軍と衝突して総辞職を余儀なくされ、代つて第3次桂内閣が組閣されたが、尾崎、犬養毅らは「閥族打破・憲政擁護」を掲げて運動を起し、全国に広がった。第一次護憲運動である。



13年2月5日、尾崎は有名な内閣弾劾演説を衆議院で行った。

「彼等は玉座をもつて胸壁となし、詔勅をもつて弾丸に変え政敵を倒さんとするものではないか！」

6日後に桂内閣は総辞職し、尾崎と犬養は「憲政の神様」と称された。



次の首相は薩摩・海軍出身ながら立憲政友会の支持を受けた山本権兵衛であった。政党の影響力拡大に努めたが、海軍高官による収賄事件（シーメンス事件）が起こり退陣した。14年4月、大隈重信内閣が成立し、尾崎は16年10月まで司法大臣を務めた。15年の総選挙で内務大臣が選挙干渉を行ったが、尾崎は「地方官が選挙に干渉したら検挙する」と閣議で宣言し、防止に努めた。

16年に吉野作造が民本主義を唱え、普通選挙権獲得運動が高まり、尾崎も積極的に参加した。



18年には、平民宰相といわれた原敬が初の本格的政党内閣を組閣したが、彼は納税資格を撤廃する普選には反対であった。その後、官僚や貴族院などに基盤をおいた内閣が続いた。

24年に成立した清浦圭吾内閣は、ほとんどの大臣が貴族院議員で、超然として政党や議会を軽視した。

尾崎、犬養らの革新倶楽部、高橋是清の政友会、加藤高明の憲政会など護憲三派は「内閣打倒、普選断行」などを訴え、第二次護憲運動が全国に広がった。



普通選挙法が
成立したぞ
バンザイ



総選挙が行われて護憲三派が大勝し、加藤高明内閣が発足した。
25歳以上の男子に衆議院議員の選挙権を与える普通選挙法が成立した。
衆議院第1党党首が内閣を組織する「憲政の常道」が慣例化し、政党政治が続いた。

「ケータイ・ジャーナリスト・コンテスト2008」開催

協会では、今年度も「ヤフー・みんなの政治」とタイアップして、3回目となるケータイ・ジャーナリスト・コンテストを行います。普段の生活の中で身の回りの出来事や社会に対して思ったこと、気づいたことを携帯電話で撮った写真にメッセージを添えて応募するコンテストです。身近な風景の中に潜む環境、福祉、少子化などの様々な「社会問題」を発見し、それらが社会や政治、自分たちの未来とつながっていることを再確認してもらおうという試みです。

昨年開催した第2回コンテストには4,270作品の応募をいただき、また一般の皆様によるインターネット投票には多くの方に参加していただきました。

参加資格は16歳以上の方で、募集期間は11月24日から来年2月1日まで、投票期間は12月10日から2月15日までです。詳細、作品応募方法は公式ホームページをご覧ください。

- ・ P C <http://kjc2008.jp/>
- ・ モバイル <http://kjc2008.jp/m/>

「藍綬褒章」

明るい選挙推進運動に長年尽力されてこられた方々が、10月31日に秋の藍綬褒章を授与され、11月18日に皇居で天皇陛下に拝謁されました。

氏 名	主 要 経 歴	氏 名	主 要 経 歴
櫛引 八千代	現 青森県五所川原市明るい選挙推進協議会会長	平井 正明	現 大阪府四条畷市明るい選挙推進協議会会長
鷺尾 絢	元 秋田県明るい選挙推進協議会委員	田寺 典似	現 兵庫県高砂市明るい選挙推進協議会会長
川岸 恭子	現 東京都国分寺市明るい選挙推進協議会会員	屋我 平吉	現 兵庫県伊丹市明るい選挙推進協議会会長
梅地 幸子	現 東京都練馬区明るい選挙推進協議会委員	川崎 篤行	現 広島県明るい選挙推進協議会副会長
杉山 六郎	現 神奈川県寒川村明るい選挙推進協議会会長	片山 アキエ	現 香川県丸亀市明るい選挙推進協議会会員
犬飼 孟	現 愛知県明るい選挙名古屋市港区推進協議会会長	石田 梅男	現 福岡県福岡市明るい選挙推進協議会会長
山倉 淑松	元 三重県伊勢市明るい選挙推進協議会会長	稲田 繁生	現 佐賀県明るい選挙推進協議会副会長
熊谷 正三	元 滋賀県安曇川町明るい選挙推進協議会会長	小田 美恵子	元 長崎県島原市明るい選挙推進協議会理事
内藤 正	元 滋賀県草津市明るい選挙推進協議会会長	森田 信良	元 鹿児島県天城町明るい選挙推進協議会会長
小田 テル子	現 大阪府羽曳野市明るい選挙推進協議会副会長		

編 集 後 記

●特集テーマは「ワークショップ」です。その全体像を第一人者である中野民夫さんと堀公俊さんにわかりやすくご紹介いただきました。また、明るい選挙推進運

動における実践例を、協会主催の研修会でご指導いただいている講師の方々に執筆いただきました。

●次号は1月31日発行の予定です。

編集・発行 ●財団法人 明るい選挙推進協会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門2丁目1番1号 商船三井ビル4F ☎ 03 (3560) 6266・6267 FAX 03 (3560) 6268
 〈ホームページ〉 <http://www.akaruisenkkyo.or.jp/> 〈メールアドレス〉 akaruisenkkyo@mua.biglobe.ne.jp

編集協力 ●株式会社 公職研

ヒトリゴトヲ、
ミンナゴトニ。

身のまわりの小さな気づきを、
写真と言葉で伝えよう。

ケータイ・ ジャーナリスト・ コンテスト 2008

毎日の暮らしの中で「これって、いいことだな」あるいは「ちょっと問題かも…」と感じたことを、世の中に問いかけてみませんか？
方法は簡単。気になったことをケータイで写真に撮って、メッセージと一緒に送信するだけ。投票という形での参加も、お待ちしております。

◎ 審査員（敬省略）



岸井 成格 (委員長)



江川 達也



香山 リカ



野口 健



八塩 圭子

◎ 表彰・贈賞：グランプリ（1名）、準グランプリ（1名）、審査員特別賞（5名）、
Yahoo! みんなの政治賞（1名）、優秀賞（7名）

コンテスト公式サイト：ご応募、作品への投票、過去の受賞作など、詳しくはこちら。

ケータイ・ジャーナリスト

検索

Yahoo! JAPANで「ケータイ・ジャーナリスト」と検索してください（PCのみ）。

<http://kjc2008.jp/>（PC専用）

<http://kjc2008.jp/m/>（ケータイ専用）



2009年2月1日（日）応募締切

主催：（財）明るい選挙推進協会／Yahoo! みんなの政治（共催）